

2026年06月分

以前にもお話をしてはいますが、私自身は外洋ヨットを所有し、レースを楽しんでいます。今年4月29日に沖縄県与那原マリーナをスタートし、愛知県三河湾のラグナマリーナまでの外洋レースに参加していました。また、5月8日にはラグナマリーナをスタートし、横浜ベイサイドマリーナまでのレースに参加していました。

スタート前日の5月7日レースに関する「艇長会議」「安全講習会」を行いました。このレース自体は私が所属代表を務めている団体が行っているものなのですが、安全講習会では三河海上保安署の職員の方に講習を実施して頂きました。

通常この手の安全講習の時間は30分前後なのですが、「航行安全」についての一般的な話となるのがほとんどです。しかし今回の安全講習会は従前とは全く異なり、ヨットの海難事故事例について救助者目線での講習が行われました。特に、海上を漂流している「要救助者(ヨットからの落水者)」をヘリコプターで救助する様子の映像が流れた際は、ヨットレース参加者のみならず安全講習会参加者全員が釘付けと

なって映像に見入っていました。それもそのはず、一般的に救助風景は静止画で見る機会が多く動画ではありません。今回上映されたのは実際の救助現場で撮影された映像であり、救助される側の注意点などについても後日談として紹介していただきました。実は、この要救助者を私は知っていたため後日話を聞くことができましたが、要救助者も自らの経験が今後の海難防止の啓蒙につながったとして、要救助から追加の体験談を聞くことができました。

海難の当事者となってしまうと、「救助の要請」を自らが発信するという行為が、意外とハードルが高いものであるということもわかりました。海難はだれしも経験したくないものです。しかし、少しの「油断」「思い込み」等から海難は意外と容易に発生してしまうものと理解しています。その場合、当事者がどのようにして救助要請を行うのかは、日ごろからの安全に対する意識の高さから違ってくるものだと感じています。